

カッワーリーの詩世界 — インド・パキスタンのイスラーム宗教歌謡

麻田豊

イスラームという、集団礼拝の場所であるマスジド（モスク）やそこから一日五回聞こえてくるアラビア語によるアザーン（礼拝への呼びかけ）を想起するかもしれないが、民衆の心にマスジドと同等、いやそれ以上に重要な地位を占めているのがスーフィズム（イスラーム神秘主義）の拠点であるダルガーとよばれる聖者廟である。インド・パキスタン各地には大小さまざまなダルガーが点在し、参道には花輪を売る店や土産物屋が軒を連ね、昼夜を問わず聖者の墓を中心とした境内は願掛けに訪れる老若男女でにぎわっている。

カッワーリーが演奏される中心的な場所は、昔も今もこうしたダルガーの中である。脱俗したファキール（修行者）が中世さながらの方法でスーフィズムの階梯をのぼりつめようと修行に励む一方、一般民衆は一步でも唯一神アッラーに近づこうとしてカッワーリーを聴きながら、神への「真実の愛」の陶酔に浸ろうとする。熱狂的エネルギーが放出されるカッワーリーの集会は、イスラームでの金曜日の始まりである木曜日の晩に開かれるが、最高潮に達するのは聖者のウルス（命日祭）のときである。ウルスの原意は「結婚」で、「神との永遠なる合一（ウィサル）」を果たした聖者は神と結婚したと考えられる。

民衆が素朴に考えるスーフィズムとは、神に対して抱く愛の表現法を模索することであり、その目的達成のために高德な聖者に宿る呪力

を媒介することで、最終的には神との合一を図ろうと努める姿勢であるといえよう。直感的・無意識的に「神に近づいたと感じる陶酔状態」に我が身を置くことが目的となる。この陶酔状態へと導く手段がカッワーリーであり、それゆえにカッワーリーの音楽や詩を聴くこと（サマー）が非常に重要視される。カッワーリーは、神を求める信徒の心を興奮させる神聖なメッセージである。

カッワーリーでは、メロディーやリズムとともに、メッセージとして歌われる神秘詩や恋愛詩が重要な役割を果たす。詩はその内容からハムド（アッラーへの賛歌）、ナアト（預言者ムハンマドへの賛歌）、マンカバト（スーフィー聖者への賛歌）の三種類に分類されるが、儀式だった聖者廟での演奏では通常、この順序で歌われる。詩に多く用いられる言語は、インド亜大陸のムスリムの文化的共通語でありパキスタンの国語であるウルドゥー語である。このほか、カッワーリーの創始者とされるアミール・フスラウ（一三三五年没）の古ヒンディー語の詩やパンジャービー語などの神秘詩も好んで歌われる。

演奏曲目は古典詩から現代詩までと幅広い。いずれも決まった韻をもつ定型詩でルバーイー（四行詩）、マスナヴィー（物語詩）、ガザル（恋愛抒情詩）である。一曲の中にこれらの詩形による短詩が織り交ぜられる。詩はスーフィズムの比喩と象徴に満ちている。一見、酒を歌っ

た俗っぽい大衆詩のように思われる詩でも、その裏面にはスーフイズムの神髄が隠されている。たとえば、酒は「アッラーに関する知識（マアリファ）」として、用いられるように。また、この世の叶わぬ愛を主題とする恋愛叙情詩ガザルも、恋愛相手を神に置き換えれば、神秘詩に早変わりする。この世の恋人と神は、ともに愛の対象となる。神への愛は「真実の愛（イシュケ・ハキーク）」、ガザルにおける愛は「比喩的愛（イシュケ・マジヤーズイー）」とよばれる。

筆者は一九八七年以来、パキスタンのカッワーリー歌手、ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン（一九四八―一九九七年）やインドのジャーファル・フサインらのCDにライナーノーツを書き歌詞を訳し、カッワーリーの紹介につとめてきた。しかし、日本でリリースされた一〇数枚ものアルバムほとんどが現在、在庫切れなしは廃盤の憂き目にあっている。そこで、これまでに訳出してきた歌詞をここに掲載し、読者諸氏をインド・パキスタンの宗教歌謡カッワーリーの詩世界へと誘うことにしよう。

■ マヌ クントー モウラー（カウル）

この曲は基本的な儀礼歌であるため、正式なカッワーリーの会では最初に歌われる。スーフイズムの根本教義を表している。ローマ字で示された部分の第一行目のアラビア語によるフレーズは預言者ムハンマド自身が述べた言葉（カウル）であることから、この歌も「カウル」とよばれる。スーフイズムにおける精神的なつながりがムハンマドに始まり、アリーに継承される原理を説いたものとして重要視される。アリーの名をもつムスリムが多いのは、こうした事情による。このカウルに曲をつけたのは、インドの首都デリーに廟があるニザームッディーン・アウリヤーの弟子で、詩人としても令名高く、ヒンドウスターニー（北インド）音楽の創始者でもあるアミール・フスラウ（一三二五年没）である。当時の旋律が今日まで伝承されている珍しい曲である。

ローマ字部分の二行目以降のズィクル（唱名）のようなフレーズはペルシャ語で、もともとは神を称える神秘的な表現であったが、いまでは意味不明である。カウルから転調する部部は、アリー（六六一年没）への「マンカバト」になっている。アリーは預言者ムハンマドの四女ファアティマと結婚し、後に第四代正統カリフとなり、シア派では初代イマームとなった。勇猛果敢な戦士として誉れ高く、神の「獅子（ハイドル、シェール、アサド）」の異名をもつ。ここではペルシャ語とウルドゥー語の挿入詩が常套句を盛り込みながら、また「我が主、アリー（マウラー・アリー）」と反復昭和詩ながらアリーの徳を称賛する。

アリーは我が導師、我はアリーの下僕なり

我はただただアリーの名に恋い焦がれる

我はハイドル（獅子の意で、アリーの異名）のもの、陶酔托鉢僧の身

我は神に愛でられしアリーのしもべなり

我はすべての托鉢僧を導く者

神の「獅子」の父が飼っていた犬なり

ムハンマドが比類なきお方のように

アリーのような人物は二度と生まれない

我は酒飲みたちの王者

我は狂信的帰依者たちの師

そして「獅子」の通りをうろつく犬

我を師と認める者にとつては、アリーもまた師

(man kunto maulaa, faa ali-un-maulaa)

dar dil dar dil dar daanii

ham tom tanaanaa naanaa taanaanaanaa rii

yalali yalala yalalala rii

yalalala yalalala yalalala rii

我が仕事はアリーの名を唱和すること

アリーの仕事は墜落した者を支えること

アリーは勇猛果敢で大地の父なり

困難に打ちのめされたこの世の神の戦士

あなたの奇跡は素晴らしく

あなたは超自然力の持ち主なり

我は導師、預言者は言う

「我が家族の名前とともに我が名を唱えよ」

アリーは我が導師

天空には、アラビアのムハンマドと記され

木々の枝には、導師アリーと記され

青々とした葉や蕾には、ザフラー（ファアティマの異名）と記され

赤い花は、アリーの息子フサインの名を唱える

アリーは我が導師

ある人はある導師を仰ぎ、別の人は別の導師を仰ぐ

我が導師はアリーなり

我は全能なる神に誓う、「我ほどの身分の高い者はいない」

我は恐れを感じない、アリーは我が導師

我が息は言う「アリー、アリー」

我が舌は言う「アリー、アリー」

我が死んだら、死装束にアリーの名を記せ

アリーは我が導師

我は導師

■アッラー フー（ハムド）

宇宙の長たる神よ、並ぶものなき神よ

唯一なる神よ、貴方のほかに神はなし

シャムス・タブリーズが神を求めし時

朗々と唱えた言葉は「貴方のほかに神はなし」

アッラーフー、アッラーフー

この大地もこの世もなかりし時

月も太陽も天空もなかりし時

まだ神の秘密が誰にも明かさぬ時

まだ何もなかりし時、貴方だけが存在した

アッラーフー、アッラーフー

称賛は人の勤め、人は称賛のために生きる

神への称賛、それは価値ある行い

善なる神の前で、罪深き人の価値はなし

なぜなら貴方は善、人の罪を背負ってください

アッラーフー、アッラーフー

預言者ムハンマドが昇天し

神の御座にひれ伏した時

天使たちは預言者にかく語りぬ

「被創造物の中で貴方こそ神の友なり」

アッラーフー、アッラーフー

貴方は天地万物の創造主

全世界は貴方のみを求め

貴方の威光は四方八方を照らす

貴方は並ぶものなき神、宇宙の長

アッラーフー、アッラーフー

貴方のほかに神はなく、唯一なる神よ

貴方は想念と探求の源、貴方こそ希望

貴方は瞳を輝かす光、貴方は心の声なり

貴方は過去、現在、未来に存在する

アッラーフー、アッラーフー

神の唯一性（タウヒード）はイスラームの教えの基本であり、「アッラーのほかに神はなし、預言者ムハンマドはアッラーの使徒である」という信仰告白にも表されている。一節ごとに反復される「アッラー・フー」は「彼こそアッラー」の意味で、神の名を唱和するズィクルで頻繁に用いられるフレーズである。このフレーズを繰り返し聞くことで、聞くものは心の中で神を想起し、徐々に神に対して自己の精神を高揚させることができる。ハムドでは、神の唯一性のほか、全知全能の神のさまざまな性質（九九の性質がある）も称えられる。

■おお、永遠に不滅なる神よ（ハムド）

あなたは情け深きお方（アッラー）

公明正大なるお方（アッラー）

守護者にして信徒の罪を隠し（アッラー）

唯一の神にして罪を許して下さるお方（アッラー）

この世の主、糧を与えて下さるお方、万有の創造主

あなたはすべての秘密に通じる

おお、永遠に不滅なる神よ！

あなたはまさに唯一無比なるお方（アッラー）

あなたは清嬢にして完全無欠なるお方（アッラー）

あなたは存在の源にして（アッラー）

信徒の敵を嘲笑するお方（アッラー）

あなたの実体に栄光あれ

あなたは困難を解決されるお方

いたるところ、あなたを称える声

おお、永遠に不滅なる神よ！

身分相応の願いを請え、多くを請うな（アッラー）

愛の道を歩むなら、愛を請え（アッラー）

いかなる時でも満足感を失わず（アッラー）

アッラーにアッラーの情けを請え

おお、永遠に不滅なる神よ！

わたしの心に永遠の炎を燃やし続けたまえ（アッラー）

わたしの息をあなたのお告げで満たしたまえ（アッラー）

皇帝の座る玉座などわたしには必要なし（アッラー）

ムハンマドのしもべたることで十分

おお、永遠に不滅なる神よ！

あの方は預言者の中の首長（アッラー）

全世界で神に選ばれたお方（アッラー）

あなたは楽器、あの方は音（アッラー）

あなたとあの方は秘密を分け合った間柄（アッラー）

あなたは言葉、あの方は言葉の集成

あなたは支配者、あの方は玉座

あなたとあの方は切つても切れない仲睦まじき仲

おお、永遠に不滅なる神よ！

わたしは絵画、あなたは絵師（アッラー）

あなたは寛仁大度のお方、わたしは困窮者（アッラー）

わたしは跪拝する者、あなたは跪拝されるお方（アッラー）

わたしは肉体、あなたは血液（アッラー）

あなたの名を唱えることで、悲しみが和らぐ（アッラー）

わたしの心はなぜ悲しみに暮れるのか

おお、永遠に不滅なる神よ！

いつも度を過ぎずわたし、おお主よ（おお主よ）

留まることを知らぬわたし、おお主よ（おお主よ）

あなたの怒りを買うことは必至

最後の審判の日に、わたしを辱しめたまうな

おお、永遠に不滅なる神よ！

このハムドは、まずアッラーの性質を表す名前いくつかを韻律に合わせて並べたマスナヴィー詩形で始まる。「おお、永遠に不滅なる神よ（ヤーハイユ、ヤーカイユーム）」は二つの性質、「ハイイ（生きている）」と「カイユーム（永遠の）」による神への呼びかけである。いずれも唯一神アッラーの「最も美しき名前」といわれる九九の性質から取られたもの。クルアーンにも「アッラーのほかに神はない。彼こそは生ける神、永遠に在るもの」（第三章第二節）と記されている。そのあと、神への称賛、信徒への警告、神への嘆願、神と預言者ムハンマドの関係を説く詩が畳み掛けで歌われる。神への嘆願が含まれているので、この種の詩は「ムナージャート（嘆願）」とよばれる。随所にコーラスで発せられる「アッラー」はサマーの時に信徒が発するズイクル（神の名の反復唱和）を喚起する。

■偉大で至高なるアッラーよ（ハムド）

あなたへの称賛の言葉は、「神は永遠なり」

あなたこそ見本、「あなたは唯一無比なり」

あなたの完全さは、この世のすべての完全なる物の中にあり

あなたは、すべての栄光ある物の中で燦然と輝き

世界の長たる預言者ムハンマドは、あなたの具現者なり

偉大で至高なるアッラーよ

あなたは、至高なる存在

あなたが発する言葉は、比類なし

おお我が主よ、あなたを称賛するは

精霊と天使と人間たち

偉大で至高なるアッラーよ

我が空（から）の物乞い袋を、満たしたまえ

我が上に、慈愛の雨を降らせよ

身なの物乞い袋を、満たすお方よ

あなたこそ王者なり

■わが主の名を唱えつつ（ハムド）

我は我が主の名を唱えつつ、宴を始める

我が名誉をまもり給え、我はあなたを称え奉る

あなたの慈悲で運河開ける、我はあなたに跪拝する

あなたの戸口でこうべを垂れ、我が義務を果たす

墜落させるも我が物にするも、あなたの意のまま

あなたの慈悲を信じつつ、我は過ちを繰り返す

今宵、宴に集う者たちの望みを叶え給え

この賛歌とともに、我はあなたに祈り奉る

唯一神アッラーを称える詩「ハムド」。ここでの「宴」は音楽集会（カッワーリーを聴く会）を、また「あなたの戸口」はモスクを意味する。詩形はガザル。

■私は路地裏をさまよい歩く（ムナージャート）

私は無為に路地裏をさまよい歩いているのではない
恋の味を知る私は、貴方の姿を求めてさまよい歩く

ああ神よ、私は神を振り乱してさまよい歩く

罪多き私は、心を乱してさまよい歩く

私は愛の酒を飲み、恋人の周りをさまよい歩く

飲んだくれのようだが、私は正気で歩いている

ああ恋人よ、これは友情を結ぶための儀式ではない

ああ恋人よ、もう別離には堪えられない

ああ恋人よ、私は我が主の顔を一目拝みたい

私はシャムスのしもべ、托鉢僧のようにさまよい歩く

ペルシャの偉大なスーフィー詩人であったジャラールッディーン・ルーミー（一二〇七—一二七三年）のペルシャ語による陶酔抒情詩。神への強い願いを詠うこうした詩は「ムナージャート（嘆願）」というジャンルに属す。ルーミーはトルコの神秘主義教団であるメヴレヴィー教団の創始者で、この教団はズイクル（神の名の反復唱和）として旋舞することで行われる。アフガニスタン北部のバルフで生まれたが、のちにトルコ中南部のコンヤに移った。この町で、放浪神秘主義者シャムスッディーン・

タブリーズィー（一二四七年没）に出会い、神秘主義の教えを受けた。彼が詠んだ膨大な量の詩は「マスナヴィー」という名で編まれ、中央アジアを含むペルシャ語圏のみならず、インド亜大陸でも文学に大きな影響を与えた。

■預言者ムハンマドを想うと（ナアト）

預言者を想うと、我らの心の園は芳香に満ち
まるで預言者が我らが宴にいらしたかのよう

粗衣まとったお方が宴にいらした

求める物を求めよ、得るべき物を得よ

粗衣をまとったお方が宴にいらした

「神に感謝を」と叫べ、ご主人様がいらした

さあ起きよ、支えなき者よ、ご主人様がいらした

両世界の恋人を崇敬するは我らのつとめ

月よ星よ、黙れ、ご主人がいらした

粗衣をまとったお方が宴にいらした

「ムハンマド」という名の甘い響き

預言者の名を唱えることの心地よさ

唇より溢れ出る賛歌の調べ、両手には托鉢用の鉢

見よ、これこそ御主人を求める者の姿なり

神のほかには眼中になく、頭にはクルアーンの冠

何と粗衣をまとったお方は、我らと同じ姿

すべての聖者がひたすら求めるお方

我が主は聖者の中の聖者様

■粗衣をまとった預言者ムハンマド（ナアト）

粗衣をまとった預言者ムハンマドは

ウンマ（イスラーム共同体）を繁栄させたお方

迫害を受けつつ祝福を与え続けた我が主に

私は全身全霊を捧げてお仕えする

私は躓きながら一歩一歩歩む

我が恋人の恩恵あふれる威光を見るがいい

私は罪に罪を重ねてきた人間

あの方は恩寵に恩寵を与えてきたお方

我が預言者の恵みを何と言い表そう

誰ひとり地獄に送るまいと必死に努めたお方

この世で人々は自分勝手に振る舞っているが

我が預言者は地獄の業火から救い出して下さる

いまさら両世界の王の威光について問うな

預言者たちの王で、アリーの息子たちの祖父なり

私は我が恋人に献身し、疎の恩恵にあずかる

預言者は「信仰告白」の涼風を送ってください

預言者ムハンマドを称える賛歌（ナアト）で、パンジャービー語の詩。「粗衣をまとった人（カムリー・ワラー）は預言者の愛称である。

■托鉢僧は慈悲を請う（ナアト）

我らは托鉢僧、あの方の慈悲を請う

我らは日夜、マディーナのあの方に祈りをささげる

我らは主の神々しい美に酔いしれる

その方の名は「粗衣をまとったお人」

我らはあの方の托鉢層なり

最後の審判の日、我らには堂々と神と対面できる資格がある

我らが誇りとするもの、それは

我らはあの方の托鉢僧なり

我らはしもべ、しもべであることが我らの誇り

地獄で我らを見て、預言者は神におっしゃる

「おお神よ、放免せよ！」と

地獄の業火よ、我らを烈火の目で見んなかれ

汝は知らぬか、我らが誰の托鉢僧なのかを

傍観者たちよ、我らを嘲笑の目で見んなかれ

汝らは知らぬか、我らが誰の托鉢僧なのかを

あの方は自らは何も請わず何も求めず

何と、あの方はたいそう豊かなお方

あの方の世界に住みたいなら、とくと見るがよい

あの方の所持品は石の枕と黒い粗衣のみ

あの方は、そう、あの方はたいそう豊かなお方

民への供給者、だが家では質素な暮らし

神の啓示を受けられたお方、だが粗食に堪え忍ぶ

このように神に愛されたお方は、この世にほかになし

ムシロの上に座してはいるが、天上に座するお方

そう、あの方はたいそう豊かなお方

両世界の光はムハンマドに現れる

クルアーンの英知はムハンマドに現れる
アッラーの御姿はムハンマドに現れる

たしかに、この世は神の御意志で変化する

だが、この宇宙を支配するはムハンマドなり

神の慈悲の秘密はあの方にだけ明かされた

その秘密を知ろうと、幾多の聖者が輩出した

デリーへ行き、ニザーミーになった聖者あり

「砂糖の宝庫」なる聖者は神に近づいた

皆、貴方を通して祈りを捧げる

我らは托鉢僧、あの方の慈悲を請う

我が行いにこれ以上の善行はなし

我らはひたすらムハンマドを称え、その報償を請う

我らは托鉢僧、あの方の慈悲を請う

これも預言者ムハンマドを称えるナアトであるが、信徒がひたすら預言者の慈悲を
請い求める様子が詠われている。デリーのニザーミーはニザームッディーン・アウリ
ヤー（一三二五年没）を、「砂糖の宝庫（ガンジェ・シャカル）」なる愛称を持つ聖者
はパキスタンのパンジャーブ州パークパッタに廟のあるファリードウッディーン・
ガンジェ・シャカル（一二六六年没）を指す。

■額を慈愛のジューマルで飾り給え（ナアト）

主よ、両世界の預言者を媒介として

主よ、戦いの勝者を媒介として

アラファートで、我が罪を二分せしめよ

ハサンに半分、ししてフサインに半分を与えよ

貴方の慈悲を信じぬもの、我が心にあらず

神に請うことを知らぬ者、真の請願者にあらず

守護者たる神よ、我が罪を問いただすなかれ

我は慈悲を請う者、裁きには値せぬ者

神に選ばれしムハンマドの名を口にする時

心は慰められ、安らぎを覚える

ムハンマドの名も、神の御名に匹敵する

困難苦難の時にこそ、役に立つ名前なり

アッラーの威光を、我らは目にしているのか

マディーナの美しき姿を目にしているのか

「ムハンマドの家系に祝福を」と唱える時

我らはアラブの使徒を目にしている

決して高慢な態度で座るでない

ムハンマド様の館では、礼儀正しく座ること

*

額を慈愛のジューマルで飾り給え

粗衣をまとったお方の宴が開かれている

慈愛に満ち、誠実で寛大なお方となつて

天から神の光が降りてきた

額を慈愛のジューマルで飾り給え

私はひしひしと感じる

あの方の宴の席に神の御姿が現れている

恋する者たちよ、もし望むなら

預言者ムハンマド様の館を参詣せよ

神よ、涙ぐむ我が望みが叶いますように

これまでの努力が報われますように

もう頼る人もいない、もう死んでもかまわない

神よ、我が心から邪念が取り払われますように

ムハンマド様の名を唱えながら死ねますように

預言者ムハンマド様の館を参詣せよ

心の中で視線を落とすがいい

目の前に、預言者様の住む路地が現れよう

お願いです、私の頭陀袋にもお恵みを

皆の頭陀袋にお恵みを施されたではありませんか

何と素晴らしい光景よ！

貴方のほかに、最高天に到達した者はなし

神の館に到達したのは、預言者様だけ

天空飛行の晩、神が隠れる帳に到達した時

帳の裏から声がした「汝には我が姿を見せよう」

何と素晴らしい光景よ！

額を慈愛のジューマルで飾り給え

粗衣をまとったお方の宴が開かれている

「ジューマル」は女性が頭頂から額の中央に垂らす装身具のこと。きらびやかな装身具でなく神の慈悲と慈愛で身を飾るべき、と女性に対して説いている。預言者ムハンマドは羊毛（スーフ）でできた黒い粗衣を着ていたとされるが、これはまさにスーフ（スーフが語源）の姿であった。スーフイズムではムハンマドが最初のスーフイーとみなされる所以である。ここでは、マディーナ（メディナ）にあるムハンマドの墓への巡礼が奨励されている。「昇天（メーラージ）」とは神から授かった奇跡で、ムハンマ

ドは天使ジブリール（ガブリエル）に連れられて天国への梯子を昇り、最上天で神兆を拝んだという故事を指す。

■あなたは世にも稀なるお方（ナアト）

燦然と神々しい光を放つ貴方

神は隠れて見えないが、貴方は我らの眼前にいる

莊嚴なる貴方を知らぬ者はなし

神の次に位置する者は貴方なり

現世と来世の首長、貴方は世にも稀なるお方

貴方の戸口はカアバ神殿も羨望するほど

貴方の顔はクルアーンなり

貴方は最後の預言者、万有の統率者、預言者の中の王

貴方の姿は永遠の美、全世界が貴方に身を捧げる

貴方は「昇天」の時の花婿なり

あなたは創造主の家にたどり着いた

貴方は神の客人、天界の客人なり

預言者ムハンマドを賛美するナアト。ムハンマドは四十歳の時に大天使ジブリール（ガブリエル）を通じて神の啓示を受けた。イスラームでは、アードム（アダム）に始まる預言者の系譜はムハンマドで終わるとされる。これを「預言者の封印」とよぶ。詩の中で言及されている「昇天（メーラージ）」とは、ムハンマドが翼をもち人間の顔をした子馬ブラクに乗ってマッカ（メッカ）からエルサレムへの夜間飛行をし、そこから七つの天を通って天国へ昇ったという故事を表す。エルサレムはマッカとマディーナ（メディナ）に次ぐイスラームにおける第三の聖地である。この「昇天」によつて、ムハンマドは神の偉大なる徴を見たという。ムハンマドを花婿、神を花嫁にたとえている。結婚は「神との精神的合一」を意味する。聖者の命日祭である「ウルス」

が結婚を意味するのも、同じ考え方による。

■あなたは慈悲深きお方、私は罪深き身（ナアト）

（マウラーナー・ルーミー作、一二〇七―一二七三）

あなたは慈悲深きお方、私は罪深き身

あなたの慈悲にすがって、これまで生きてきた

人生は礼拝のためにある

礼拝なき人生は、恥に値する

あの人を想起すること、これこそ信仰の根幹なり

物乞いすら、あの人を想起して支配者になる

預言者ムハンマド様は命の光、我が師なり

罪深き者たちの、心のよりどころ

ムハンマド様が、この世の穢れから清められた時

どの方角へ顔を向けても、そこには神のお姿があった

あの方の精神は、神の世界を羽ばたく鷹のよう

あの方は、両世界を慈悲で満たすお方

預言者たちの中でも、傑出した預言者なり

この天と地には、ムハンマド様以外、誰もいない

神を賛美するお方、皆に賛美されるお方

神を礼拝するお方、皆に礼拝されるお方

アッラーの友たち、友たちのアッラー

師を見る者は、神を見る

神と師を同一視できない者は

弟子であるとは言えない

単なる神学者が、ルーミーになれるわけでなし
もし* シヤムス・タブリーズィー老師に
仕えなかったなら

*ルーミーの精神的指導者。

■預言者ムハンマドのほかは、目に入らず（ナアト）

預言者ムハンマドのほかは、目に入らず

あなたのような恋人は、見たことがない

黒い粗衣をまとった我が師！

多くの預言者が、この世に遣わされたが

あなたのようなお方は、見たことがない

すべての預言者は尊ばれるも

あなたのようなお方は、見たことがない

あなたの素晴らしさを何と表現しよう、おお、神に愛されしお方

端麗で美しく、魅力的で気高く、あなたは「神の影」

あなたの顔は満月のように、あなたの黒髪は闇夜のよう

髪の毛はモーセの言葉、衣服はアッラーの言葉

髭と頬と額、すべてが「アッラーのほかにはなし」と唱和する

あなたのようなお方は、見たことがない

預言者の資質において、あなたに優る者はなし

あなたに匹敵する者は、どこにも見当たらず

あなたのようなお方は、見たことがない

*ヤスリブの王よ、あなたの美に対抗する者はなし

花の華麗さ、色や香りや新鮮さも、あなたに勝てず
この気高さ、この魅力

この立ち居振る舞い、この愛、この質素さ
すべて、たぐいまれなもの

預言者よ、私はあなたに命を捧げる

あなたの姿を見て、私の口から出た言葉は

おお、輝ける満月のような顔、おお、神々しい光を発する額

おお、漆黒の髪の毛、おお、酔いしれた瞳

あなたを何と呼ぼう

我が精神と呼ぼう、いや世界の精神と呼ぼう

まさに、あなたは神の栄光なり

すべての栄光の源である栄光なり

おお、あなたは何と美しく、何と気品高く

何と完全であることか。

あなたのようなお方は、見たことがない

あなたのような親愛なお方を、見たことがない

美しき人を何人も見てきたが、

あなたほど美しいお方は、見たことがない

おお、* ムスタファーよ

あなたのようなお方は、見たことがない

もし誰かが、神を見たければ

***「ミーム」のヴェールを取って、神を見るがいい

私は天国など熱望しない

熱望するのは、預言者の町と墓廟を見たことがない者

預言者ムハンマドのほかは、目に入らず
あなたのようなお方は、見たことがない

* マデイナーナ(メディナ)の古い名前。

** 「神に選ばれし者」の意味で、ムハンマドを指す。

*** アラビア文字の文字名でローマ字の「M」。Ahmad(ムハンマド)からmを除くと Ahad(唯一なる神)になる。

■灯明皿に油を満たせ(ナアト)

今日、アーミナの膝を贈物の山で埋めよう

この子は将来、神の使徒になるお方

灯明皿に油を満たして祝おう

天界では歓喜の声が沸き起こり

地上では雨季の調べが奏でられる

「今日ムハンマドが誕生した」と

大天使ジブリエル(ガブリエル)が声高く叫び

楽園の天女が鈴を鳴らして踊り回る

今日、アブドゥッラーの家の中庭に

アダムからイエスマまでもが祝福に訪れる

天使たちは賛歌を歌い地上に降り、星の光が瞬く

預言者の一団が訪れる、アブドゥル・ムッタリブもいる

イブは祝いの贈物を持参し、マリアは祝儀をねだる

預言者ムハンマドの生誕を祝う「ナアト」で(言語はヒンディー語東部方言)、生誕の時の喜びに満ちた様子が描写されている。ここでの「油」は慶事の際に用いられるギー

(精製バター)のこと。また、「アーミナ」は預言者の母、「アブドゥッラー」は父、「アブドゥル・ムッタリブ」は祖父の名前である。

預言者の生誕は「ミラード」とよばれ、その生誕祭(イード・ミラードウン・ナビー)は盛大に祝われる。この日はイスラーム国では休日となる。

■アッラーとムハンマド、それに四人の友(マンカバト)

アッラーとムハンマド、それに四人の友

ハージ、ハージャ、クトブ、ファリード

人々はファリードを称え、天国に己の居場所を見つけようとする

四人の聖者は真と善の道を歩んだお方たち、我らに名誉を授けて下さるお方たち

ファリードの名前を聞きながら、恋人たちは彼に命を捧げて殉教する

恋人たちは心の中でそつと彼を愛し、友とする

ガンジェ・シャカルのほうを見つめては、至福に我が身を浸す

天空の無数の星くずのように、この世の人々は地上で合いを確かめ合う足首にたくさんの愛の鈴を巻きつけ、聖者の弟子たちは踊り狂う

パキスタンのパンジャブ州パークバタタンに廟のあるファリードウッディーン・ガンジェ・シャカル(一二六六年没)を称えた賛歌で、マンカバト。彼の口からは甘い言葉が次々にほとばしり出たといわれ、「ガンジェ・シャカル(砂糖の宝庫)の異名を持つ。「ハージャ」はインドにチシュティー教団を導入したムイヌッディーン・チシュティー(一二三六年没)を指し、その廟はインドのアジュメールにある。他の二人もチシュティー教団の高名な聖者を指している。

■ダーター様の戸口に(マンカバト)

ダーター様の戸口に座り、人々は願掛けをする

神の恵みをここから得て、こころゆくまで踊りに興ずる

わたしのハージャ様はこうおっしゃった

「この世にダーター様のような聖者様はいない」

ダーター様は決して手ぶらで帰すこともなく、誰の心をも傷つけない

これがあなた様の愛の証

あなた様のお名前はこの世に轟き渡り

人々はあなた様の戸口に口づけし、願いをかなえてもらう

あなた様はアリーとファアティマに可愛がられたお方

わたしはいつまでもあなた様の友であり、恋人でありたい

ラホールのダーター・ガンジ・バフシュことアリー・フジュウェーリー(一〇七二年頃没)を称えるマンカバト。民衆から「ダーター様(至福を与える者)」と親しまれており、その廟はパキスタン最大級のもののひとつである。アリーは預言者ムハンマドの四女ファアティマと結婚した第四代正統カリフである。カッワーリーの詩では、アリーはスーフィーの精神的支柱として、またファアティマは理想の女性として、しばしば言及される。

■真理はアリー(マンカバト)

時には壁が揺れ動き、時には扉が振動する

アリーの名を聞くや、ハイバルの扉が振動する

人々の王アリーよ、比類なき勇者アリーよ

神の獅子アリーよ

真理はアリー、我が主アリーよ

命が身体から離脱する時

我が唇に残るはアリーの名のみ

この名を唱える時、精神は解放される

信徒よ、この名こそ真実の名

この名が汝の苦痛を和らげる

この名に宿る呪力の秘密を解くがいい

「困難よ、我が眼前から消えうせろ」

さもなくば、「困難の除去者」に語りかけよう

なぜなら、あの方こそ我がアリー、アリー

身体にもアリーの名、舌の上にもアリーの名

我が死す時、屍衣にもアリーの名をしるせ

アリーへの愛なくして、望みは叶えられず

礼拝の報償のまた決して得られず

神のしもべよ、よいか、聞くがいい

アリーを得ぬ者は神をも得られず

真理はアリー、我が主アリーよ

いくら探せども、目には名にも見えず

目的地の印は道案内の助けで見えた

我らは神の館でとにかくアリーに会えた

神を探した、アリーの家で神に会えた

預言者の使命を全うするはアリー

偽善に満ちた暗黒世界を照らすはアリー

神の啓示の真髄こそアリー

信仰という真珠貝の中の真珠こそアリー

礼拝の主題、それはアリーの名の唱和

信仰の中心、それはアリーの名の唱和

心の安らぎを求める者たちよ

心の平安を得るには、アリーの名を唱和せよ

聡明なる見識を得た時、何と言おう

我はいかなる美を見たか

我は万物に顕在する預言者とアリーを見た

神に誓つて、アリーと預言者、二人は一心同体

アリーを見た、それは預言者を見たこと

預言者を見た、それは神を見たこと

「獅子を崇めることは信仰」とは預言者の命令

アリーは預言者の精神・肉体・命そのものなり

廉直なるアリー、神の剣たるアリー

聖者の中の聖者こそアリー

真理はアリー、我が主アリーよ

神の獅子はアッラーの手の内にあり

称賛の対象は比類なき王者アリー

預言者の家系に匹敵する家系なし

アリーほどの人物は二度と生まれず

真理はアリー、我が主アリーよ

あらゆる聖者の鼓動、それはアリー

天国に吹く微風、それはアリー

正道を万人に示す者、それはアリー

預言者と神に愛されし者、それはアリー

アリーが誕生した場所はカーバ神殿の中
生まれ出るや目にしたものは預言者の顔
アリーは光、アリーは輝く満月なり

預言者ムハンマドの娘婿で第四代正統カリフにしてシーア派初代イマームであるアリーを称える賛歌で、「マンカバト」ないしは「マナーキブ」とよばれる。勇猛果敢な戦士として誉れ高いアリーは最初のスーフィーとみなされており、後代のスーフィーたちの精神的支柱として崇敬されている。「獅子」「困難の除去者」などの別称を持つ。「ハイバルの砦」云々は、この砦の扉をひとりで持ち上げたという故事による。「昇天の晩（メーラージュ）」は、ムハンマドがエルサレムに旅してそこから天界へ昇つて神の姿を見たという故事を指す。

■聖者様のしもべたちに（マンカバト）

ダーター様の恵みは万人のためのもの

ムハンマドの光の泉が沸き出でる

ダーター様は花婿、何と素晴らしい光景か

聖者が居並ぶ中、ダーター様の結婚行列が進む

ダーター様のしもべたちに祭りを祝わせ給え

ダーター様のご登場だ、宴を盛り上げさせ給え

この光はこの世のダーター・アリー様の光

この光はダーター・ハジユウェーリー様の光

狂信的な信徒よ、我らがダーター様をお参りせよ

ダーター様の姿は神の光で輝いている

ダーター様はアリーの子孫で預言者の家系

聖者ジーラーニー様にその威光を尋ねてみるがいい

幾多の皇帝が現れては消え、帝国が交代したが
我らがダーター様の統治は不変なり

この戸口で恭しくこうべを垂れさせ給え

バグダードからアジュメールから聖者が訪れた

ダーター様を通られる場所にひれ伏させ給え

これはダーター様の特別なお恵み

これは信仰の花飾り、ヌスラットに聞かせ給え

ダーター様のしもべたちに祭りを祝わせ給え

亜大陸最初のスーフィーであるダーター・ガンジ・バフシユことアリー・フジユウェーリー（一〇七二年頃没）を称えるマンカバト。民衆から「ダーター（至福を与える聖者様）」と愛されており、パキスタンの古都ラホールにあるその廟はパキスタン最大級である。ここでの祭りとは命日祭（ウルス）のことで、多くのカッワールたちがカッワリーを披露する。バグダードからの聖者はアブドゥル・カーディル・ジーラーニー（二一六六年没）を、アジュメールの聖者はインドの地にチシュティー派神秘主義を導入したムイーヌッディーン・チシュティー（二二三六年没）を指す。

■アリーは我が呼吸（マンカバト）

アリーを思い起こせ、アリーに救いを求めよ

ハイバルの砦を攻略できたのは、アリーの支えあつてこそ

我が主アリー、アリーは我が呼吸

呼吸するたびに、アリーを思い起こせ

アリーは我らの胸にあり、我らの息とともにあり

アリーは我らの周りにあり、我らの瞳の中にあり

恋人たちの住みかは、アリーへの道の途中にあり

神よ、皆々にアリーの庇護を与え給え

呼吸するたびに、アリーを思い起こせ

我が主アリー、アリーは我が呼吸

アリーは預言者に可愛がられた髪の毛の光り

神はアリーのもの

神はカアバ神殿に現れる

我が主アリー、アリーは我が呼吸

我が主アリー、アリーの主はアッラー

アリーは預言者を主と仰ぐ者の主

アリーは聖者の中の聖者、聖者たちの誇り

我が主アリー、アリーは我が呼吸

アリーは聖者たちの冠

アリーは信徒たちの望み

アリーの足音をひとつひとつ数えてみよう

我が主アリー、アリーは我が呼吸

アリーを知ることとは神を知ること

アリーの力は全世界の知るところ

我が主アリー、アリーは我が呼吸

アリーはアッラーの誉れ高き獅子

まさに我らの導師、預言者の紅玉

我が主アリー、アリーは我が呼吸

アリーはがつしりとした獅子

ハーシム家の輝き、比類なき勇者

頼れる者がいなければ、アリーを頼れ

我が主アリー、アリーは我が呼吸

■優しい眼差しを向け給え（マンカバト）

預言者の宴の灯りよ、おお貧者を慈しむ者よ

神の国の春よ、おお貧者を慈しむ者よ

どうかお聞きを、おお貧者を慈しむ者よ

我は貴方に声を掛ける、おお貧者を慈しむ者よ

優しい眼差しを向け給え、チシュトの王よ

聖者の中の聖者、神に愛されし聖者様

聖者の長、預言者の代理人

恋人たちの崇敬の的、紙に愛されし聖者様

貴方は万有の守護者、我らは貴方に請い願う者

万物に授け給え、預言者の慈愛を

我らは罪深き者、貴方は慈悲の持ち主

我らはいずこに、貴方はいずこに

貴方が放つその光、それは神に近づいた証し

貴方はムハンマドの威光を解釈するお方

貴方は神ではないが、しかし神に誓って

貴方は神の徴、神に愛され死聖者さま

このマンカバトは、インド亜大陸にチシュティー教団を導入したハージャ・ムイーヌッディーン・チシュティー（一二三六年没）を称える詩である。この教団は現在、インド・パキスタンで最大の勢力を誇る神秘主義教団で、「存在の唯一性」を説き、禁欲を厳守しつつ平和を指向する。特にズィクルを重んじ、音楽と踊りを容認する。ムイーヌッディーン・チシュティーの廟はインドの首都デリーの南西、ラージャスターン州

のアジュメールにあり、ムスリムにとつての最大の巡礼地（ズィヤールタガー）のひとつに数えられている。インドとパキスタンの間の往来が自由でない現在でも、同廟における年一回のウルス（命日祭）にはパキスタン政府派遣の巡礼団が送られている。「貧者を慈しむ者（ガリーブ・ナワーズ）」とはムイーヌッディーンの愛称で、人々の間ではこの名で通っている。チシュトとはアフガニスタン北西部のヘラート近くの村の名で、チシュティー教団の創設者、ハージャ・アブー・イスハークが一時居住していた由緒ある地で、教団名はこれに由来する。

■我が師ムイーヌッディーン（マンカバト）

（シャー・ナスィールッディーン・チラーゲ・デヘリー作、一三五六年度没）

師の中の師、ムイーヌッディーン

この世界の誉れ、ムイーヌッディーン

師たちの宝冠、ムイーヌッディーン

我が師よ

あなたは世界の帝王、ムイーヌッディーン

どんなに悪女であろうとも、私はあなたのもの

我が師よ、どうかご慈悲を

あなたは世界の帝王、ムイーヌッディーン

あなたの慈悲がほしい

私の腕を支えてほしい

私の欠点は見ないでほしい

なすべきことを、実行してほしい

どんなに悪女であろうとも、私はあなたのもの

我が師よ、どうかご慈悲を

あなたのまなざしで、私は幸せになれる

まなざしを向けてくれないければ、死んでしまう
欠点だらけの私、美徳など何ひとつ持たない私
あなたの慈悲で、私は幸せになれる

あなたは世界の帝王、ムイーヌッディーン

他人の顔を、どうして見よう

私にはあなたが必要、ムイーヌッディーン

私はあなたの戸口に横たわる

どうか、私の名誉を守りたまえ

我が師よ、私の名誉を守りたまえ

ハールーニー聖者様のために

私の運を開いてほしい

最愛のあなた様、あなたは唯一無二

私の身の上を聞いてほしい、ムイーヌッディーン

教えてほしい、私はどこへ行けばいいのか

我が師よ、私はどこへ行けばいいのか

ねえ、私はどこへ行けばいいのか、教えてほしい

私はあなたの戸口へ来るよう、髪に導かれた

我が師よ、私はどこへ行けばいいのか

ねえ、私はどこへ行けばいいのか、教えてほしい

私は苦しみ悶える不運な身、ムイーヌッディーン

預言者の孫たちのために

ナスィールの名誉を守りたまえ

■アリー ダム ダム（マンカバト）

あなたの戸口で、人々は陶酔して踊り狂う

あなたの戸口で、人々は陶酔して踊り狂う

これは、世界が知るところ

師を溺愛する皆が、あなたの偉大さを認めている

アリーダムアリーダムアリーダム

（息をするたびに、アリーの名前）

あなたの戸口で、人々は陶酔して踊り狂う

これは、世界が知るところ

師を溺愛する皆が、あなたの偉大さを認めている

セヘワンの師よ、セヘワンの師よ

ジュレーラールカランダルジュレーラール

セヘワンの師、苦悩する者たちの守護者

あなた以外、誰が我らの訴えを聞くか

我らを救いたまえ

病に苦しむこの私に、ご慈悲を

死の瞬間まで、日夜、唱えます

アリーダムアリーダムアリーダム

ジュレーラールジュレーラール

ジュレーラールカランダルジュレーラールカランダル

私は陶酔して踊り狂う、あなたへの賛歌を歌う

運に恵まれれば、来年もあなたの戸口に参詣に来ます

おお我が師よ、私は無力なる身

あなたの戸口で、人々は陶酔して踊り狂う

師を溺愛する皆が：

■カルバラの殉教者（マルスィヤ）

カルバラの殉教者を思い出すと

世界は震えおののき、血の涙を流す

おおフサインよ、おおフサインよ

フサインは王なり、フサインは皇帝なり

フサインは宗教なり、フサインは宗教の守護者なり

あなたに勝る者はなし、あなたに匹敵する者はなし

フサインの姿を見て、神も最後の審判の日に言う

「預言者の孫よ、汝は預言者の後継ぎなり」

おおフサインよ、おおフサインよ

カルバラの悲劇、それは前代未聞の出来事

剣の刃でフサインの首が切り落とされた時

天空さえも恐怖にわなないた

「獅子」の息子はどのような最期を迎えたのか

悲痛な叫びをあげて、あの世に召されたに違いない

おおフサインよ、おおフサインよ

フサイン（六二六―六八〇）は預言者ムハンマドの孫で、第四代正統カリフで「獅子」の異名を持つアリーとその妻ファティマの息子。シーア派第三代イマームで、「殉教者の長」として知られる。

六八〇年、フサインはウマイヤ朝を打倒すべくクラーファに向かったが、途中のカルバラの地で敵の大軍に虐殺された。その日はヒジュラ暦の一月であるムハラム月一〇日であった。この日には、今でもシーア派の信徒はフサインの殉教を悼む。フサ

インはシーア派だけでなく、スンナ派からも崇敬を集めており、多くの「マルスィヤ（挽歌）」が詠まれてきた。フサインの頭部が安置されているカイロのサイイドナー・フサイン・モスクは、ムスリムの巡礼地のひとつになっている。このモスクの壁に掛かっている額には「神の預言者（彼に神の恩恵と平安あれ）は語った。『フサインは私を助力し、わたしはフサインを助力した』」という言葉が書かれている。

■わたしは知らない（ガザル）

たどり着いた場所がどこなのかわたしは知らない

そこは仮の宿だったのか

いたるところで屠られた動物が身悶えていた

そこは仮の宿だったのか

杉の木のようにすらりとした

妖精のような麗しき乙女

その姿がわたしの心をかき乱していた

そこは仮の宿だったのか

永遠なる天界の神の館で

饗宴をとりしきるは神自身

宴を照らすともしびは預言者ムハンマド

そこは仮の宿だったのか

カッワーリーの創始者といわれるアミール・フスラウ（一三三五年没）作のペルシャ語によるガザル（恋愛抒情詩）である。「屠られた動物が身悶え（ラクセ・ビスミル）」とは、神を称えるためにいけにえに捧げられた動物が痙攣する様子を示している。神との神秘的合一がはかられた瞬間を詠んでいる。

■別れた恋人を想うと（ガザル）

別れた恋人を想うと、涙が雨のように目から流れ落ちる

この世に別離などなければいい、涙が雨のように目から流れ落ちる

恋人がよその国へ行かないように、待ち人が別離に堪えなくていいように

この世に別離などなければいい、涙が雨のように目から流れ落ちる

心を奪って知らぬ顔をする恋人、そんな恋人には神も知らぬ顔

この世に別離などなければいい、涙が雨のように目から流れ落ちる

恋人との愛の絆はもはやなく、私の心の傷は深まるばかり

ファリードよ、不毛の大地がふたたび肥沃な土地になるように

この世に別離などなければいい、涙が雨のように目から流れ落ちる

人々は一日に五回神を思い起こすが、私は四六時中神を思い起こす

別れた恋人を想うと、涙が雨のように目から流れ落ちる

恋人なしで、どうして時を過せよう

涙で濡れて乾かぬ目、どうして眠りにつけよう

この狂える心をどう説得しよう

恋人の思い出は忘れようにも忘れられず

別れた恋人を想うと、涙が雨のように目から流れ落ちる

記憶が徐々に薄れていくのがやるせない

冷淡な恋人よ、人生そのものが私に冷たくあたる

最後の吐息とともに、私はあなたの名前を口走る

涙が雨のように目から流れ落ちる

現代パンジャビー語詩人のガザルで、恋人とはこの世の女性とも神とも解釈できる。「涙が雨のように…」の表現が生き生きしている。

■この心地よい陶酔（ガザル）

酌人の視線にひかれて飲んでしまった私
波間に漂うように飲んでしまった私

慈悲深き神よ、この罪を許し給え

つい欲を出して飲んでしまった私

神の許しなしで飲む私ではないのに

恋人の瞳にひかれて密かに飲んでしまった私

そばにいるようでいて遠くにいる恋人

でもいつも私の心の中にいる

あの人の瞳を見たその日から

私は心地よい陶酔に浸っている

私の心の中に住むあの人は

暗黒の中に差し込む一条の光のよう

もう私は無我の境地をさまよう

酔いが全身に回っている

*

この心地よい陶酔

悪いのはあなたのその視線

私に酒の味を覚えさせたのはあなたの視線

あなたへの愛が、あなたへの想いが

あなたの誘惑する視線が、私を酒飲みにしてしまった

酒の味は？ 酔い心地は？

これすべて、あなたへの愛のたまもの

どんな視線を投げて飲ませたのか？

もう私は忘我の境地をさまよい歩く

あなたの誘惑する視線が、私を酒飲みにしてしまった

世界は酔いしれ、宇宙は酔いしれ

昼も夜も、暁も黄昏も酔いしれ

酒盃も酒瓶もすべて酔いしれ

誰も彼もあなたのその瞳に酔いしれる

酌人よ、あなたの酒場には重分に酒があるが

あなたの瞳から滴る酒を注いでほしい

酌人よ、あなたは媚びを売り、しなをつくるが

今はただ、この酒盃に酒を注いでほしい

あなたの誘惑する視線が、私を酒飲みにしてしまった

あなたへの愛は私の命

礼拝も身の清め方も知らぬ私だが

あなたが目の前に現れれば、ひれ伏すだろう

そう、私の命はあなたへの愛だから

あなたを必死に思い起こすは私の努め

あなたが幸せならば私も幸せ

あなたに惚れるなんて、これは奇跡

こうべを垂れた場所に、私は神殿を作った

今度は誰をじらすつもりなのか？

私をどのように消し去るつもりなのか？

いったいどこから矢を射るつもりなのか？

あの人の前に、私はまず短剣を置き

次に肝臓、心臓、頭を並べ置いた
そしてこう述べた「今度は誰をじらすつもりなのか？」

私は生まれつきの愛の奴隷

世の信心・不信人など気にしない

私がこうべを垂れるのはあなただけ

そこいらの礼拝所など求めない

私の祈禱は尋常でなく

教会も神殿も必要でない

あなたを一目見ることが

ああ、礼拝にも優れる

そう、私の命はあなたへの愛だから

あなたの名前を唱えよう

あなたの前にひざまずこう

私の愛は叫びつづける

「あなたを神にしよう！」と

私は貴方の名前を唱えるが

ほうぼうの家々では私の噂ばかり

世間の者が私を忘れ去つてもいい

もし私があなたを忘れることができるなら

私の心には生き続けている

あなたの限りなく美しい姿が

あなたが照らさぬ灯りなど

そんな灯りなど消してしまおう

雨はどうして降るのかと尋ねると

「額の汗の滴を落としたから」との答え

雷はどうして落ちるのかと問うと

「目と目を合わせて下に向けたから」との答え

昼と夜がどうして交差するのかと問うと

「顔に巻き毛を垂らしたから」との答え

音楽にどうして魔力があるのかと問うと

「甘い言葉で話を聞かせたから」との答え

私の望みはどこまで叶ったのかと問うと

「燃えている灯りを消し去った」との答え

我が友情に幸あれと祈るがいい

両手をあげて私の幸せを祈るがいい

あなたを殺人者に仕立てたのは、この私なのだから

我が愛しき君よ、私に目を向け給え

私はいつものように半死半生の身

貴方はそれでも正気なのか？

そんなに口汚く罵らないでほしい

私に感謝するがいい、愛しい人よ

貴方に話す術を教えたのは、この私

この心地よい陶酔／悪いのはあなたのその視線

私に酒の味を覚えさせたのはあなたの視線

■不実な人を愛することもあるものさ（ガザル）

悲しみを運んでくるほかに、何ができよう？

燃え盛る宴を開くほかに、何ができよう？

我は光明を請いつつ、暗黒を求めにきた者

己の家に火をつけるほかに、何ができよう？

私は無邪気な春の中に、おまえを見つけた

幾多の美しき道行く人の中に、おまえを見つけた

我が恋人よ、帳の裏に隠れるおまえに誓って

私は涙の滴の中に、おまえを見つけたのだ

悲しみの話を語って聞かせるたびに

涙は、まつげの下で微笑んでいる

あの人のためにすべてを失ったのに

あの人は、私をこの世から消し去ろうとする

本当？

*

不実な人を愛することもあるものさ

どんな人でも恋人は恋人だもの

運命に書かれているのは悲嘆のみ、仕方ない

あの不実な人を私は愛している、仕方ない

本当？ 不実な人を愛することもあるものさ

私の愛の強さを見よ、あの人との約束を守り

何度も騙されたが、それでも信じていた私

本当か？ 不実な人を愛することもあるものさ

私はあの人の目配せに、命さえ捧げたが

あの人は、私の愛など信じようとしなかった

本当？ 不実な人を愛することもあるものさ

私はただ愛を経験してただけ

心についた火を、もう消すことはできない

おまえを得ることができないとは、思いたくない

おまえへの思いが心から去らないから

本当？ 不実な人を愛することもあるものさ

巻き毛を顔から払って話をしろ

明るいところで話をしろ

こんな話し方がいたいあるか？

心の痛みを察して話をしろ

本当？ 不実な人を愛することもあるものさ

私が口を開けばおまえは言う「貴方は誰なの？」

まじめに答えろ、この口のききかたは何だ？

不実の人を愛することもあるものさ

どんな人でも恋人は恋人だもの

死ぬ者は、喜び勇んで死を選んだが

恋人の不実は相変わらずのまま

どんな人でも恋人は恋人だもの

恋敵がいたとしても、それが何だ

薔薇の花に、刺はつきもの

約束の晩に、あの人が現れなくても

ただひたすら、死を待てばいいだけさ

涙する者よ、人生とはつまり

愛があつてこそその人生なり

不実の人を愛することもあるものさ

■酌人よ、俺はおまえの酒場の見世物さ（ガザル）

世間への苦情など忘れてしまいたい、酌人よ

さあ飲ませろ、もつともつと飲ませろ、酌人よ

ちよつと愛の話でもしようではないか、酌人よ

そうすれば世間の様子も変わるだろう、酌人よ

酒杯など俺には必要ない、酌人よ

おまえの視線に幸あれ、それだけで十分さ

*

酌人よ、俺はおまえの酒場の見世物さ

悪酔いした雲がふらつきながら流れてきた

さあ喉を潤させてくれ、恋人よ

愛しい君よ、愛しい君よ

ごんごん酌をしてくれ、おまえの酒場に乾杯だ

愛しい君よ、愛しい君よ

数個の酒杯が拒んだとしてもかまわない

おまえの視線に幸あれ、酒場はいくらでもある

愛しい君よ、愛しい君よ

一杯の酒杯で、宴の席は酔いしれている

もはや手におえないこのありさま

おまえに狂った男を、世間は見るだろう

男はわけの分からぬことをつぶやいている

さあ見よ、おまえに狂った男の状態を

酌人の瞳はあつち、俺の心はこつち

今日は酒杯と酒杯のぶつかり合いだ

さあ杯の話をしろ、酒場の話をしろ

あの春が訪れ、あの雲が沸き立つ

酌人よ、俺はおまえの酒場の見世物さ

■誘惑の瞳から守り給え（ガザル）

誘惑の瞳から、アッラーよ、我を守り給え

若き人から、アッラーよ、我を守り給え

いかなる災難に見舞われようとも

美しき人から、アッラーよ、我を守り給え

あの人の無邪気さに惑わされるでない

あの人に決して騙されるでない

あの人は微笑みながら略奪する人

あの人の計略から、アッラーよ、我を守り給え

あどけない顔で話しかけてくるが

口で言うことと心で思うことは別々

月のような美しい顔をしているが

そのよこしまな心から、アッラーよ、我を守り給え

はやく天国と天女がほしくせに

日夜、礼拝に励むふりをしている

ああ、あなたのような偽善者から、

純真ぶる人から、アッラーよ、我を守り給え

あの人が誠実でないのは生まれつき

それは世間の皆が知っていること

善良なる人々を騙し続けるあの人

無垢を装う人から、アッラーよ、我を守り給え
誘惑の瞳から、アッラーよ、我を守り給え
若き人から、アッラーよ、我を守り給え

■そつとヴェールを取る人（ガザル）

屋上でそつとヴェールを取る人

黄昏時、その光景をそつと眺める私

伏し目がちに妖艶なしぐさをするあの人

そつと私に求婚しているにちがいない

そんなに媚びを振りまいて歩くでない

人前で私は悩殺されてしまう

おまえの気まぐれな態度、その微笑

そのしぐさに私は戸惑うばかり

止めどなく流れる涙

誰かが密かに私の名を呼んでいるにちがいない

屋上でそつとヴェールを取るあの人

■あの人の戸口にたどり着きたい（ガザル）

あの人の戸口にたどり着きたい

そのあとどうするかなど、聞いてくれるな

偶像の前でこうべを垂れることが罪ならば

視線であの人を崇拝することにしよう

あなたのいうことも聞かねばならぬし、酌人よ

酒杯に恥をかかせるわけにもいかぬし

今夜、酒杯をくれようがくれまいが
この酒場で夜を明かすことにしよう
こちらでは、浮かぬ顔した私がひとり
あちらでは、あの人を宴が賑わしい

暗黒を我が家へ呼び寄せ、代わりに

あの人を家を明るく灯すことにしよう

あの人との関係を絶つたものの

最低の礼儀だけはわきまえねばならぬ

最後の息を引き取るまで、あの人に

不平不満だけは言わぬことにしよう

あの人を戸口にたどり着きたい

そのあとどうするかなど、聞いてくれるな

■一晩中、酒杯をかたむけると（ガザル）

一晩中、わたしが酒杯をかたむけると

星々は、わたしに恭しく挨拶をしてくれる

さあ、飾り立てよう、喜びに満ちたこの宿を

ここには麗しき旅人たちが逗留しているのだから

我が心に神を想起させる偶像たちを

わたしは尊敬の念をもつて見つめたい

命を売り払え、わずかな愛と引き換えに

あなたのしもべは、こうした商売さえするのだ

一度でいいからわたしは眼差しを向け給え、酌人よ

わたしは身も心もあなたに捧げているのだから

古典定型詩の名称であり、おもに恋愛抒情詩をさすガザルでは、時には神への「真の愛」が、また時にはこの世の男女間の「叶わぬ愛（仮の愛とよぶ）」が詠われる。この詩はパキスタンの現代詩人カティール・シフアーイーのガザル。ここでも「酒杯」「酔人」といった、イスラームでは禁じられている酒に関する言葉が見られるが、神秘主義の解釈によれば、酒は「アッラーに関する知識（マアリファ）」を意味する。

■愛の国に確固たる地位を築け（ガザル）

大地や天空のために

あなたがいるのではない

あなたのために、この世があり

この世のために、あなたがいるわけではない

愛の国に確固たる地位を築くがいい

運命を信じる前に、自我を高めよ

神は信徒に尋ねるだろう

「汝の人生の目的は何だ」と

愛の国に確固たる地位を築くがいい

この自我は天使の性質なり

自我あればこそ、神に近づくことができる

愛の国に確固たる地位を築くがいい

新しき時代、新しき朝と夕べを築くがいい

神がおまえに自然を知る心を与えるならば

物言わぬ薔薇やチューリップにも、言葉を授けるがいい

ヨーロッパのガラス職人をありがたがるな

純粋な土器で酒杯を作るがいい

わたしは君主の生活ではなく、貧者の生活を営む
自我を売るでない、貧困の中で名声を得るがいい

愛の国に確固たる地位を築くがいい

パキスタンの建国構想を練った民族詩人ムハンマド・イクバル（一八七六一九三八）の詩が歌われている。パキスタン北部のスイヤールコートで生まれたイクバルはパンジャーブの古都ラホールで学んだあと、ケンブリッジとミュンヘンで留学生活を送った。詩人・弁護士・政治家・哲学者として知られる。彼の多くの詩にはメロディーがつけられ、現在でもいろいろな場で歌われている。イクバルがロンドンで息子のジャーヴェードからの手紙を受け取った時に詠んだ有名な詩「ジャーヴェードに宛てて」が歌われている。ヨーロッパの文明を盲目的に受け入れるのではなく、祖国の伝統を保持しつつイスラームの復興を願う父親の息子にたいする心情が発露されている。イクバルの詩を大衆化したのは、ヌスラットの父親のウスタード・ファテ・アリー・ハーンであったが、ヌスラットもその伝統を引き継いでいる。

■あなたとの別離にさいなまれ（ガザル）

あなたとの別離に、さいなまれ

苦しみが、私の心に巣くった

苦しみが、私の心に巣くった

一度でいいから、あなたを得たい

あなたには、何の損があろう

あなたとの別離に、さいなまれ

私は、路地裏をさまよった

私は、路地裏をさまよった

そして愛につまずき、難題が解けた

あなたとの別離に、さいなまれ

恋人よ、あなたはなぜ私の愛を忘れたのか
我が瞳は、あなたの姿を追い求めたが
恋人の姿は、現れず

あなたとの別離に、さいなまれ

私は、過ぎゆく日々を数えた

人生は、もう終わろうとしている

人生は、もう終わろうとしている

しかし、あなたを待つ時間はまだまだ続く

あなたとの別離に、さいなまれ

■夢の中に現れないで（ガザル）

不実な人よ、夢の中に現れないで

お願いだから、私をこれ以上苦しめないで

眠っている苦しみを、起こさないで

不実な人よ、夢の中に現れないで

お願いだから、私をこれ以上苦しめないで

安らかに、眠らせて

苦しみの物語を、語らないで

この罰に、私は耐えられない

私のどこが悪かったの？ 不実な人よ

あなたは、私を世間から引き離れた

眠っている苦しみを、起こさないで

これ以上、あなたを思い出させないで

なぜ、私はあなたを信頼したのだろう

あなたへの愛は、私には不釣り合いだった
私を幸せから離れたのは、あなた

愛の代わりに得たものは、あなたの不実

あなたは私との関係を、大切にしなかった

眠っている苦しみを、起こさないで

これ以上、あなたを思い出させないで

私を炉の中で燃やして、あなたが得た物は？

不実な人よ

これ以上、あなたを思い出させないで

不実な人よ、夢の中に現れないで

お願いだから、私をこれ以上苦しめないで

眠っている苦しみを、起こさないで

これ以上、あなたを思い出させないで

■一晚中わたしは（ガザル）

一晚中、わたしは恋人との別離で眠れず

夜が明けても、闇夜の恐怖で眠れず

我が身は蠟燭のように火あぶりに処せられ

恋人に身を焦がして、わたしは眠れず

わたしはマジヌーン、牢獄の看守は

わたしの足鎖が立てる音で眠れず

悲嘆と落胆はもはや不倶戴天の敵

この敵との戦いで、わたしは夜通し眠れず

ムガル朝最期の皇帝、バハードウル・シャー・ザファル（二七七五―一八六二年）が詠んだガザル。「ザファル」は雅号で、「勝利」の意。彼は十三万行にものぼる詩を詠んだといわれ、今日でも、彼の多くのガザルはガザル歌手によっても歌われている。「恋人」は神ともこの世の女性とも解釈できる。「マジヌーン」はアラビアの有名な説話「ライラーとマジヌーン」の男主人公カイスのあだ名で、「狂人」の意。

■行者様を慕って（神秘詩）

私は行者様を慕ってお供します

別の人を慕う人もいるけれど

私は行者様を慕ってお供します

行者様は私と一緒に、私は行者様と一緒に

行者様のものになった私は

もう昔の私ではない

私は行者様を慕ってお供します

もう耳輪をつけてしまったもの

あの人はただの行者ではない

あの人は神様の生まれ変わり

行者の衣がとてよく似合う

行者様に髪を結ってもらったの

もうあの人に魂を奪われてしまったの

クルアーンに誓って、行者様は私の信仰

でも、私を苦しめる行者様

私はあの人にはふさわしくない

私は行者様を慕ってお供します

もう耳輪をつけてしまったもの

この行者様は賢い行者さま

手には「アッラーに栄光」の花輪

「粗衣をまとった行者様」と呼ばれている

私は行者様を慕ってお供します

もう耳輪をつけてしまったもの

行者様が家に来たら

私はあの人にお仕えます

ねえ来て、貴方にお仕えしたいの

私の視線は貴方を待ち望み

私の心は貴方と呼んでいる

貴方と仲違いしてから

カラスが塀の上で鳴かないの

ねえ来て、私の視線は貴方を待っている

心も視線も落ち着かぬまま

あのきれいな顔が忘れられない

恋にさいなまれる私は涙に暮れる

ねえ来て、行かないで

ねえ来て、私の視線は貴方を待ち望み

私の心はあなたを呼んでいる

貴方は愛を知っているお方

来て、私は貴方のものよ

行者様が家に来たら、この苦悩も終わる

あの人を胸に抱きしめよう

たくさんのお供物を捧げて

ねえ来て、私の視線は貴方を待っている
ブッレー・シャーよ、行者様がやってきた
私の家の戸口に腰をおろした
あの人はヒールを奪い取った
あの人は姿を変えてやってきた
私は行者様を慕ってお供します

■お願い、私の心を返して（神秘詩）

貴方が目の前にいてくれないなら
お願い、私の心を返して
貴方の愛を信じきった私
貴方の愛に心を捧げた私
貴方が目の前にいてくれないなら
お願い、私の心を返して
もう恋人との別離に堪えられない
お願い、私の心を返して
こうして遠く離れて、時だけが過ぎる
貴方に会えても、何の得にもならない
私は小さな要求をしているだけ
お願い、私の心を返して
貴方の心も秘密を明かしてほしい
貴方とは痛みと喜びの話をした仲
一瞬たりとも私と一緒にいれないなら
お願い、私の心を返して

別れるのは貴方の自由だけど
私は貴方のものになりたい
昔の辛い日々の話を繰り返すなら
お願い、私の心を返して
あなたが目の前にいてくれないなら
お願い、私の心を返して

■神をひたすら想う私は（神秘詩）

（フリー・アリー・カラन्दル作、一三三四年没）
神をひたすら想う私は、どこへ行くのか
神をひたすら想う私は、どこへ行くのか
神をひたすら想う私は、どこへ行くのか
長い間、我を忘れていた私
神をひたすら想う私は、どこへ行くのか
神との合一をひたすら願う私は、どこへ行くのか
神の顔に魅せられ、神の香りのとりこになり
神の路地裏の土埃である私は、どこへ行くのか
神を知り、神に命を捧げ
神と結ばれた私は、どこへ行くのか
私はカラन्दル・フリー・アリー、友への愛に身を焦がす
神への愛に心を縛りつけた私は、どこへ行くのか
神をひたすら想う私は、どこへ行くのか

■私はあなたに命を捧げます（神秘詩）

（シャー・フサイン作、一五三九―一五九九）

主よ、私はあなたに命を捧げます
私は、あなたに命を捧げます

私は欠点だらけ、本当に欠点だらけ
まるで、暗黒のよう

あなたは美しい、こよなく美しい
暁のように、美しい

主よ、私はあなたに命を捧げます

あなたは、私たちの渴望の的

あなたは、私たちに何でも与えて下さるお方

主よ、私はあなたに命を捧げます

恋人の胸に抱かれる者もいれば

恋人を得られぬ者もいる

主よ、私はあなたに命を捧げます

私には、才能もなく技もない

ひたすら、涙を流すのみ

主よ、私はあなたに命を捧げます

托鉢のフサインは語る

「神の恩寵あれば、幸せになれる」

主よ、私はあなたに命を捧げます

私は、あなたに命を捧げます

■私を認めてくれるかは、あなた次第（神秘詩）

（ブッレー・シャー作、一六九二―一七五八）

私のすべてはあなあのもの、この命はあなたのもの

あなたは、欠点だらけの私を助けてくれる人
私の名譽を、守りたまえ

私を認めてくれるかは、あなた次第

ねえ、私の中庭に来て、いけにえになりますから

私には、あなた以外、誰もいない

森の中を、林の中を、花園の中を探します

世界中を探し回ります

ねえ、私の中庭に来て、いけにえになりますから

世の人々にとっては、単なる牛飼いで

* ラーンジャーは、私にとっては信仰そのもの

ねえ、私の中庭に来て、いけにえになりますから

両親を捨てて、あなたにすがりついた私

主よ、どうか慈愛のまなざしを

どんなに悪女であろうとも

あなたの下女になった私

私はあなたにすがりつく、私はあなたの奴隷

私は、あなたの下女たちの下女

私はあなたにすがりつく、* シャー・イナーヤト様

私の愛を守りたまえ

ねえ、私の中庭に来て、いけにえになりますから

私を認めてくれるかは、あなた次第

* パンジャーブの悲恋伝説「ヒールとラーンジャー」の主人公。

** ブッレー・シャーの精神的指導者。

■私はあなたを崇拜する（神秘詩）

心の寺院に、あなたを座らせて

友よ、私はあなたを崇拜する

友よ、私はあなたを崇拜する

心の寺院で、私はあなたを崇拜する

あなたが私を見なくても、私はあなたを見続ける

あなたを見た以上、もう誰にも用はない

あなたを見た以上、もう皆に別れを告げよう

友よ、私はあなたを崇拜する

私は心から、あなたを崇拜したい

私の心の問題に、もはや口を挟む者はおらず

友よ、私はあなたを崇拜する

世の人は、*カーバ神殿へ**ハッジに行くが

私のカーバ神殿は、あなたの路地裏

あなたの戸口を、カーバ神殿と思い

あなたに、宗教心と信仰心を捧げる

友よ、私はあなたを崇拜する

この世に美しき人、多かれど

私の目は、あなたのようなお方を見たことがない

この瞳の中に、あなたを座らせて

あなたに、宗教心と信仰心を捧げる

友よ、私はあなたを崇拜する

友よ、私はあなたを崇拜する

* マッカ（メッカ）にある神殿。

** 年一回行われるマッカ大巡礼。

■少女よ、私のこの糸車は何にも増して大事なもの（神秘詩）

（ブッレー・シャール（二六九二―一七五八）のカーフィー）

少女よ、私の存在はこつこつと作られた貴重なもの

糸車で糸が一本一本紡ぎ出されるように

愛はたやすいものだ、人は誤解しているが

私の愛はすべてを破壊し尽くす

私は未婚のままランジャール（ヒールの恋人）のものになった

父は強引に別の家に嫁がせたがつている

世間の目には、私の恋人は水牛を食ませる牧童にすぎないが

私の恋人は私の心のマッカ（メッカ、中心）そのもの

ブッレー・シャールは真実を語った

シャール・イナールは彼の導師なり、少女よ

■あの人我が家を訪ねてくれたのだから（神秘詩）

（ブッレー・シャールのカーフィー）

時を打つ人を追い出して

やっと、あの人我が家を訪ねてくれたのだから

あの人顔を見ることができるようになって、何て不思議な光景

もう心の痛みはすべて吹き飛んだ

時を打つ人を追い出して

やつと、あの人が我が家を訪ねてくれたのだから
もう私は無意識の状態

いつたい私はどこへ嫁いだのだろう

この話、隠そうとして隠せない

こうした神のご加護が受けられるなんて

時を打つ人を追い出して

やつと、あの人が我が家を訪ねてくれたのだから

いつたいどれほどのお守りをもたらしてきたことか

多くの呪い師に来てもらったけれど、願いは今やつとかなった

今やつと、愛しの人が家を訪れてくれた

これから幾十万年も、ずっとあの人とともに生きていくわ

時を打つ人を追い出して

やつと、あの人が我が家を訪ねてくれたのだから

時を打つ人は何度も銅鑼を打ち鳴らし

あの人と一緒にいる時間をどんどん削っていく

私の心のうちを知るならば

さあ、銅鑼を捨て去るがいい

時を打つ人を追い出して

やつと、あの人が我が家を訪ねてくれたのだから

私の身体の中を果てしなく音楽が響き渡る

その音楽は、名演奏家たちが奏でている

私は礼拝も断食もすっかり忘れてしまった

酔いが満ち満ちた杯を飲まされたから

時を打つ人を追い出して

やつと、あの人が我が家を訪ねてくれたのだから

ブッレー・シャーよ、「確信」の寝台は心地よいもの

私はやつとのことそこまで泳いで勝ち取った

こんな機会に恵まれることはめったにないこと

もう離れ離れになることなんてできはしない

時を打つ人を追い出して

やつと、あの人が我が家を訪ねてくれたのだから

■ねえ、あなた（ギート）

ねえ、あなた、わたしの聖者様が家に来たのよ

この中庭に好運が訪れたのよ

わたしは期待して立っていたの

手首に花飾りをつけ、化粧をしてね

聖者様の姿を一目見たら

もう命も財産も失ってしまったわ

着飾って聖者様のそばに行つたの

聖者様の端正な姿を見たら

我を忘れてしまったわ

アミール・フスラウ作のヒンダヴィー語（古ヒンディー語）によるギート（歌謡）であるが、女性がその女性友だち（サキー）に向かって歌っている。「聖者様（ハージャ）」はチシュティー教団をインドにもたらしたムイーヌッディーン・チシュティー（一二三六年没）を指し、その廟はインドのラージャスターン州アジュメールにある。現在でもフスラウの作と伝えられる多くのギートが、さまざまな人生儀礼の際に女性によって歌われ続けている。

■ ラング（アミール・フスロウ作、作曲）

チシュティ教団の儀式では最後に歌われる曲。アミール・フスロウがニザームッ
デイン・オウリヤーと最初に出会った時の感動を母親に伝えている。ニザームッ
デインのほかにも、この教団の聖者たちの名前が出てくるので、聖者たちに敬意を
表して聴衆は起立する。ここで用いられている「ラング（色）」は「喜び、気持ちの高
ぶり、満悦」などを表す。

素焼きの灯明皿よ、私の言うことを聞いてほしい

私の導師の家には「色」がある

なので、一晩中起きていてほしい

今日は「色」がある、母さん、「色」がある

あの人の家の中庭には「色」がある

今日、私の「色」は我が導師と同じ「色」

私は我が導師、聖者ニザームッデインを見出した

私は我が導師、聖者アラーウッデインを見出した

私は我が導師、聖者フアリードウッデインを見出した

私は我が導師、聖者クトブッデインを見出した

私は我が導師、聖者ムイーヌッデインを見出した

おお、聖者ニザームデインよ、

今やこの私に、全世界が開かれた

どこを見ようと、あなたは私とともにおられる

ほうぼう私はあなたを探し続けた

あなたの「色」は私が好む「色」、ニザームッデインよ

この「色」は他のどこでも探し出せなかった、ニザームッデインよ

今日、私の「色」は我が導師と同じ「色」